

祖神と主神

多田山公遺稿

多田

「惠保婆、我が主に宣り給はく、我れ今汝を生みたり、總べしこの國をば汝に与へん。」

此の本文に依りて、惠保婆とは祖神にして、我が主たる基督を生み給ひし靈なること明なり

「神の靈水の面を蔽へり。」

と云へる靈は即、此の靈なる惠保婆にして零なり。

故に極大極小にして「之れを開けば六合を蔽ひ、之れを閉づれば蜜に蔵るる」ものにして、「物在り、天地に先ちて存す」と云へる物なり。

「天地初判、一物在於虚中」と云へる物にして、虚にして、中外にあらず、有無にあらずなり。

一にあらず二にあらず、三四五等にあらずなるれば、零にして、〇にして、大にして、空虚なりと三書の教入来たりしところなり。

故に物ならざるの物なり、神ならざるの神なり、人無きの人なり、神無きの神なり、人ならざるの人なりとも云へるなり。之れを天御中主大御神（あまのみなかぬしのおほみかみ）とも天照大御神（あまてらすおほみかみ）とも天常立神（あめのとこたちのかみ）とも教へられたれども、日本古典には其の然ることを説せず。

僅に別天神・獨化之神・獨神隱身・一神・等の名を記したるのみ。

故に之れを知らんと欲せば、唯一専念に神名を奉称して神命を仰ぎ、神界眞理の大道に立ちて體得せざるべからず。

唯一専念神名奉称

神人來示 八神殿

神ならざる神とは〇にして零なる極大極小なれば、總べてにして、計算すること能はざる無なり。

「莫靈圓」と古典に載せたる圓なり。

此の圓は「マ」の訓みて「的」「基」「禰」「禰」「禰」等の文字言語を記すものと得べく、「高」

圓（たかまと）「的形（まとかた）」等の語と等しくして、「閻魔天（やゝま）」「摩耶（まや）」「聖母（まりや）」等と同義なり。之れを「親（おや）」とも「祖（おや）」とも「天神（あまつかみ）」とも「天祖（あめのみおや）」とも傳へたる「祖神（みおやのかみ）」なりとなす。

祖神は國を築き神をも生み給ふなれば、神の外なる神なりとは云へるなり。

「神は宇宙を造り給ふ」とも「宇宙の外なる神」とも云へるは此の祖神なれば「マト」にして「マトカタ」・「タカマト」・「サヤギナキヒ」・「アメノミオヤ」・「オヤ」・「アマツカミ」・「マリヤ」・「ヤシマ」・「マヤ」・「アメノトコタチノカミ」・「アメノミナカヌシノカミ」・「アマテラススメオホミカミ」・「エホバ」等にして、支那人が「神」と描きたるところなり。

「ミート」なり「ミチ」なり

「マ」にして「命」・「天命」・「道」・「大道」等と書く。此の「道」は「尊」の一

祖神と主神 2頁目の説明

と
零 (境地として) — [○ 無
□ 有 (無きにはあらずるなり)]

(ともに神ならざるの神)

(コトアマツカミとしてのと) ← 即. コトアマツカミ.

↓
結び結び.

ヒカリ (マの段階. アマツカミ)

即. ヒノカミ.



「神代玉代」

(来324、各自各自が◎と成り得たる時)

→ 実際には 一にして二にして

(◎と呼ぶところの◎)

これを説明した用語が ⑪. ⑫.

解 (神代七代'... コトアマツカミの領域まで及んだ、作用力の表現) ○

親 (神代五代'... アマツカミの領域における、実体としての表現) ◎

九 文字通りに解すれば、伊勢から笠沙の岬に還りつゝの意であるが、それではおかしい。記伝には還は罷の誤りとしてゐるが、それも独断である。

○ 海の大小の魚。

一 お前たちは皇孫命(すめみま)に仕えまつるかどつか。即ち御饌の魚となるかどうかの意。

二 記伝に、紐というのは、懷中におびて下帯に挿す故の名であるとしてゐるが、紐のついた小刀の意ではあるまいか。

三 動物形態説明説話である。

四 志摩の国。

三 贊は諸国から朝廷に貢進するその土地の産物、特に食料品。速贄は初物の二への意である。志摩の国から御贄を貢することは、内膳式に諸国貢進御贄、志摩国御厨、鮮鰯、月物五担、雜魚十三担。」とあり、主税式に「凡志摩国供御贄潜女舟人。」などと見えてゐる。六 この事は他書に見えてゐない。

七 神は美称、阿多は薩摩国阿多郡阿多の地にひんだ名。従つて阿多の姫の意。書紀には美人の名を鹿葦津姫とし、その別名を神吾田津姫と記してゐる。

八 神(かみ)という訓字があるのに、この神名は書を以てよめというのはおかしい。

九 書紀には「木花之開

姫」とある。サクヤは

比伝に咲光映(はくあき)の意と

てゐるが、やは感動の

詞であろう。美人を木の花の咲く美しさに譬

へた名。

5 木花之佐久夜
毘売

れ。」とのりたまひき。是を以ちて媛女君等、其の媛田毘古の男神の名を負ひて、女を媛女君と呼ぶ事是れなり。

故、其の媛田毘古神、阿邪訶(あざか)此の三字は音を以て。に坐す時、漁爲て、比良夫貝(ひらぶがひ)比より夫まで

に其の手を咄ひ合さえて、海鹽に沈み溺れたまひき。故、其の底に沈み居たま

ひし時の名を、底度久御魂(そこどくみたま)度久の二字は音を以て。と謂ひ、其の海水の都夫多都時(つぶたつ)の名を、

都夫多都御魂(つぶたつみたま)都より下の四字を以て。と謂ひ、其の阿和佐久時(あわさく)の名を、阿和佐久御魂(あわさくみたま)阿より久

是に媛田毘古神を送りて、還り到りて、乃ち悉に鰭の賣物、鰭の狹物を追ひ聚

めて、「汝は天つ神の御子に仕へ奉らむや。」と問言ひし時に、諸の魚皆「仕

へ奉らむ。」と白す中に、海鼠白さざりき。爾に天宇受賣命、海鼠に云ひしく、

「此の口や答へぬ口。」といひて、紐小刀(ひもかたな)以ちて其の口を拆きき。故、今に海鼠

の口拆くるなり。是を以ちて御世、島の速贄獻する時に、媛女君等に給ふなり。

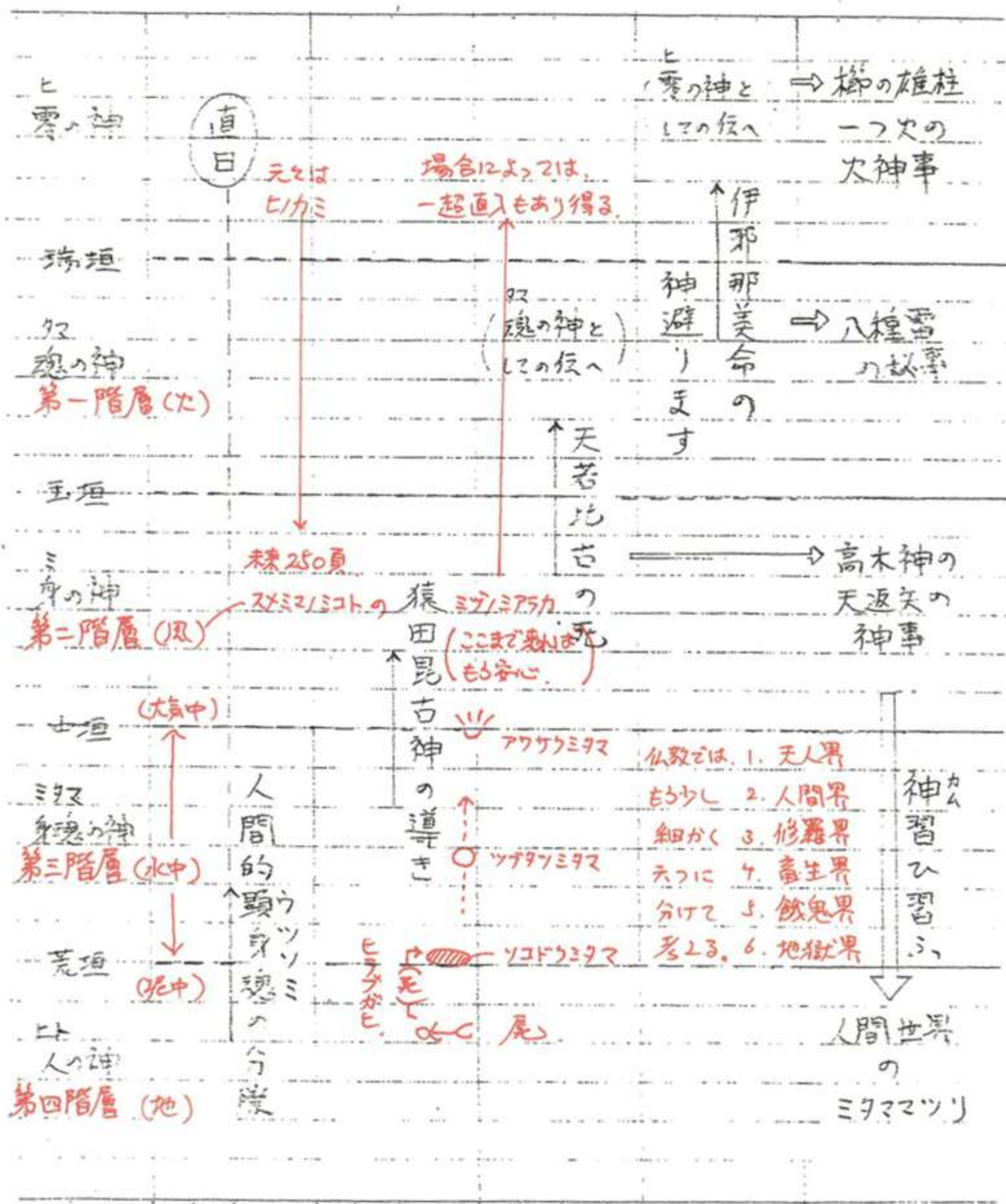
是に天津日高日子番能邇邇藝能命、笠沙の御前に、麗しき美人に遇ひたまひき。

爾に「誰が女ぞ。」と問ひたまへば、答へ白ししく、「大山津見神の女、名は神

阿多都比賣、此の神の名は音を以て。亦の名は木花之佐久夜毘賣、此の五字は音を以て。と謂ふ。」とまをし

き。又「汝の兄弟有りや。」と問ひたまへば、「我が姉、石長比賣在り。」と答

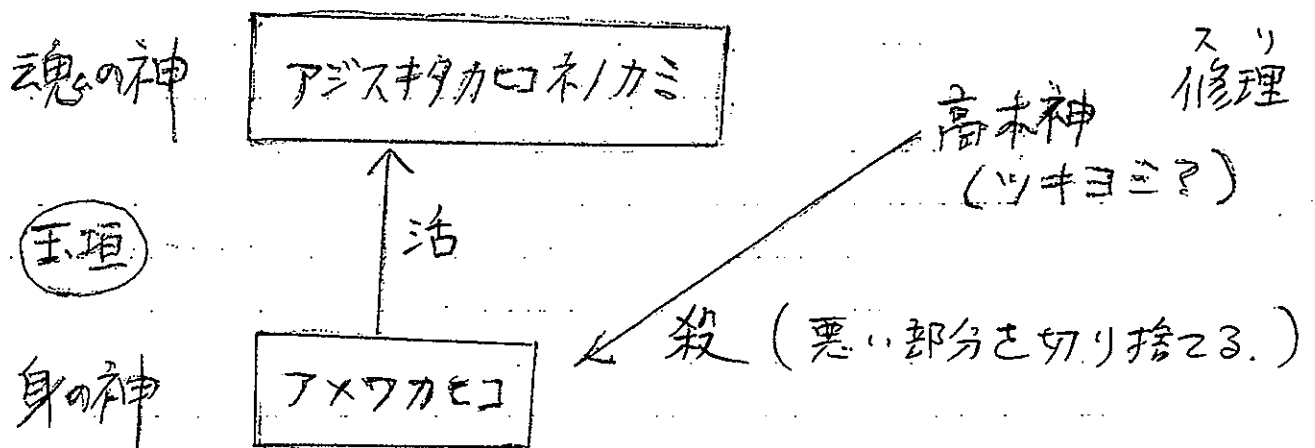
き。又「汝の兄弟有りや。」と問ひたまへば、「我が姉、石長比賣在り。」と答



図表：神の死と人の死

ヒ 零の神 (直日)	(直日)			ヒ (零の神と) しての伝へ	⇒ 櫛の雄柱 一つ火の 火神事
瑞垣				↑伊 邪 那 美 命 の	
タ 魂の神 奇身魂			タ (魂の神と) しての伝へ	神 避 り ま す	⇒ 八種雷 の秘事
玉垣				↑天 若 比 古 の 死	
ミ 身の神 幸身魂			猿 田 毘 古 神 の 導 き		⇒ 高木神の 天返矢の 神事
中垣					
ミタ 身魂の神 真身魂	人 間 的 顯 身 魂 の 分 際				神 ^{カム} 習 ひ 習 ふ
荒垣					↓
ヒト 人の神 (肉体身)					人間世界 の ミタマツリ

図表. 人の死と神の死の説明.



下位の^{ミタマ}身魂を殺すことにより、
本体はより上位の界層に上昇する。

神話では「瓜二つの友人」と表現されているが、
霊的な現実としては、

同一の存在の、異なる部分(ミタマ)の名称である。

「月神事」と幸.19頁の用語.

無宇宙	第一魂 (直日)	(数理では) 「五」①	ニギミタマ 和魂 ミタマ (御魂)	アマタスミコト 天照皇太御神
ミツガキ 瑞垣				
宇宙の 第一階層	第二魂 (霊)	④~ ↑ 合わせて、	ウシミタマ 奇身魂	↑ 合わせて、
タマガキ 玉垣				
宇宙の 第二階層	第三魂 (念)	「 霊念思考 」 ↑ コ コ ロ	サキミタマ 幸身魂	↑ ツキヤミ ツクユミツキヨミノミコト 月夜見月弓月読命
ナカガキ 中垣				
宇宙の 第三階層	思考	↓	マミタマ 真身魂 (川面用語では) 「まがみたま」	↓
アラガキ 荒垣				
宇宙の 第四階層	身体 (肉体身)		アラミタマ 荒身魂	ツクハヤスサヲノミコト 建速須佐之男命

(幸114頁より)

コト アマツ カミ	ヒ 零 (大中心)	ミ (ミコトの体)	
	↓		
			無宇宙 (高天原)
アマ ツ カ ミ	ヒカリ ◎ (直印)	神界の真理 としての 神慮同凡の御鏡 (ミコトの用)	↑
		ミスマンミタマ 総一魂 としての 奇身魂	
ウ ニ ツ カ ミ	ミタマ 身魂	1. — 2. 3. 4.	あくまでも 「完成された」 状況での話

これが「完成された」状況と
指して「国常立尊」という。

人に限らず、向上を志す生物は総べて頭を高くして休息する。或は、他物を使用するのではなくとも、自己の体軀がさうなるやうにする。

手枕の夢に通ふか。佐保媛の、桜挿頭して、君待つらしも。

さて、その、「タマノヲ」の語義であるが、此の「ノ」は接統詞で、「タマ」とは「魂」で「霊」で、変幻出没測り難き奇霊^{クシビ}であるとの義であり、その良く統一したる姿を讚美しては「玉」だと云ふのである。「ヲ」とは「緒」で「尾」で「芋」で「男」で「女」で「結ぶもの」で「合ふもの」で「合体」である。それで、「タマノヲ」とは「クシミタマ、マミタマ、サキミタマ、ニギミタマ、マガタマ、等」の結び結び整理統一せられたる「直日」^{ナホヒ}であり「直霊」^{ナホビ}であり、さうして、奇霊^{クシビ}なのであるから、生死遷転であり、また、その「生死を掌握する神権」である。

玉の緒を結び結びて、人の身は、伊着くなるなる天^{アマ}の安河。

日本の古語としては、生死遷転が則「イノチ」であり、「イノチ」を掌握するは「タマノヲ」である。

けれども、詞は時代と場所と使用者とに由つて断えず変化するから、多くの現代人は「イノチ」を「息の内」^{イキノウチ}の如くに用ゐて居る。

此のやうな言語の墮落は、その使用者が神^{カミ}拝^{マキリ}を怠り言^{カミノコト}霊^{タマ}としての音義を忘れたが為である。それ故に、現代人はまるで古典を読む能力を失つてしまつた。之れを取り戻すことは或は不可能かも知れぬ。まことに残念ではあるが、一部篤学者の間にでも保存を図るよりほかはあるまい。

次ぎは「イノチ」の語義だが、これは正しくして升る音の「イ」と、広くして平なる沃土としての「ノ」と、

血脈、血統、血族、等のチとの三音一語なので、現代使用の支那文字を当てるならば、「生死遷流」でもあらう。「遷り変り流れ行き返り来る」の義である。ところで今人の所謂「生命」とは、古語としての「イノチ」の中、現在の「ヒトクギリ」のみを指したものと変つたのである。

此のやうな言語の変遷は、その「死生觀」と相互に反映して居る。

神代の神の言靈としての「イノチ」とは、「限無限の物」が「限無限の時間と空間との裡に出入往返の妙技を演ずる」の義であるのに、中古以来の人人は、「生れて来て死んで往くまでのイノチだ」と萎縮してしまつたのである。

是くの如き「死生觀」の相違が、人間処世の大方針を高くも卑くも広くも狭くも深くも浅くも善くも悪くもするのである。

古老今人志不同。言語文章亦復然。現生一期徒馳走。空草乱離獄卒囑。

第十八章 終

第十九章 神魔の零境

「古典」とは、古い羅馬の市民階級に用ゐた詞の翻譯から転転して色々様様に使用されて居りますが、日本で「神代紀」^{カミヨノノリ}と記されたものに此の語を当てることができる。その意味での「古典」を「神代紀要」には、次ぎの如くに説明してある。

「古典トハ神代紀ニシテ、人間身出生以前ノ記録ナリ。

出生以前ナルガ故ニ、人ニアラザルナリ。人ニアラザルガ故ニ、死後ニテモアルナリ。死後ニシテ、出生以前ニシテ、人ニアラザルモノトハ、神ニシテ、魔ニシテ、神魔ニシテ、死者ニテモ生者ニテモアルト共ニ、生死ノ無キモノナリ。

生死ノ無キ中ニ在リテ、生死ヲ執持スルハ、人ニシテ魔ニシテ、生死ノ有ル中ニ在リテ、生死ヲ脱却シタルハ、神ニシテ神人ニシテ惟神ナリ。

是れは、人の「イノチ」が、人としての一期生死には拘はらず時間の限り空間の限り、その「限りの無き限り」「遷り変り流れ行き返り来たる」のであるとの意である。

之れが、人天万類の常態なので、「限り無き生命の波」だと、人間的には説明をする。けれども、それで判るかどうか、時間を認め空間に制せられて居る人間世界は、まことに不便なので、どう説明したならばよいか。

「神代には牆壁が無い。」

人として牆壁の間に生れては来ても、神の賜ひし人であるからには、その牆壁を撤去して、一円晃耀の「〇」と成り「〇」と成ることは出来る。それを古老は「死生解脱の暁」とか「天成り地定りて神聖生れます」とか教へられたので、それは則、玉の緒を結び結びて、神界樂土を築き得たのである。

雨霽れて風風ぎたれば、一言の葛城主は、善しとこそ宣れ。

まことに此れ是の零境、「一」にして二にして三にして四にして五にして六にして七にして八にして九にして十にして一となれば、一 二 三 四 五 六 七 八 九 十 四段 七段 神輪ながらに」と、古

老は説明された。

これでは猶更難解でせうか。

天界も地底もまた唯一几に在るものを。

語黙動静如如去来。

ああ。陽は没れり。月いまだ升らず。

極無極篇 終

右三篇 総べて四十有三章

以上 昭和廿三年三月廿六日 正午

る。

今。古事記の伝へた火遠理命天皇行の一節を翻訳してその一端を拝することとしよう。

火遠理命は不図した災難から海べに坐つて途方に暮れました。すると何時の間にか「鏡の船」に乗せられて遠い遠い海の際涯を際涯も無く走つて玉の井に入りました。

その井には処女が居て火遠理命にその御災難を除く方図をお教へまをした。

井には水が無くて玉ばかりである。その玉の一つ一つに火が燃えて居る。

その「火」を取つて。上も下も内も外も後も左も右も中心も外郭も唯一つの○であるとか称へながら其の通つて来た道と。やがて往くべき先と現在に居るところとを祓はれた。すると彼も此もすべてが唯一つに和ぎ。禍と思はれたものもおのづから福と変るのでありました。

古事記の本文は神話の形式を採つて居るので此の「祓」の意味も魔言と魔行とで示されてある。魔を制するには魔を知らねばならぬのでその魔言魔行を学ばせられたものである。

それで此のやうなのはその任に耐へ得る人でなければ却つて禍を招ぐことになるから秘事として漫りに人には話されぬのである。

之れを鷲宮でも神納宮でも歌詞として伝へる場合が多い。

よしありと人こそ見らめ。岩津城の楓の山は、天つ神国つ神たち神集ひ集ひたひまで。神議り議りたまへば。梅香ふ春をも待たで。桜咲く月に先だち。矢矧川幸こそ運べ。豊川の布由こそは増せ。円塗矢の赤根の色のあからあからに。

ところが。世人はそれすらも皆忘れて居る。けれども古伝は幸にして典籍に遺つて居る。古事記でも日本書紀でも旧事紀でも祝詞でも古語拾遺でもそのほか民間古老の記録を見ても皆共に「ヒ」と記してある。「ヒ」とは言である。

その文字は「比・日・火・靈・魂」等で共に「ヒ」の語に充当したのである。是れは神伝で神言で神道で言靈で「コトタマ」と称するのである。此の神伝神言神事神道言靈を解き得行じ得たるものを「真・日」と称へて来たのである。

直^{ナホヒノヒト} 日を中心として築き成されたる国を大停別^{オホタマルワケ}と称しその国の中心直日をば直靈^{ナホビノヒト}成と讃へて「天皇」と仰ぎまつるのである。

天皇の国は即天皇なのでそこに神聖国^{カミ}が成立する。

日本民族が神聖国^{カミ}を築成すれば、日本天皇国なので「日本即天皇即日本」と称するのである。

わたのはら。ふりさけ見つつ。うましみち。まぎてぞ来ます。そら見つ日高。

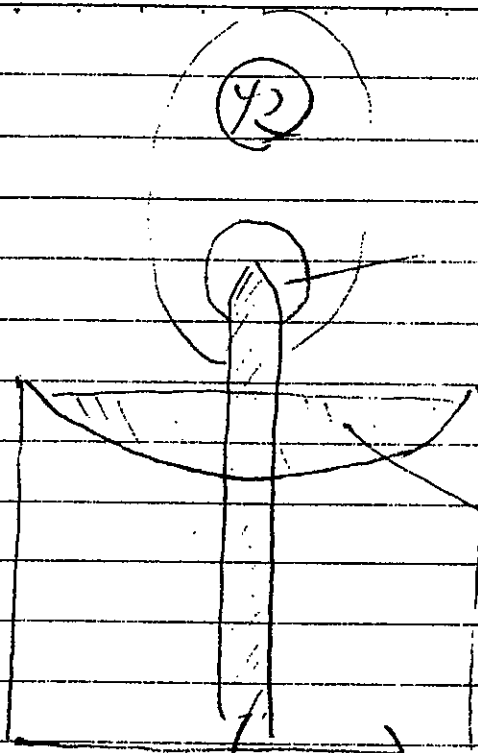
それで「天皇国」をばまた「日高見国」と讃へまつる。

天皇統治天皇国。神聖統率日高国。之れは是れ豊葦原^{トヨアシハラ}の瑞穂^{ミツホ}の秀国^{ホクニ}と称するのである。

日本天皇紀としての神代紀は都べて、天皇国築成の教へであり伝へである。その現存せるものは日本紀・古事記・風土記・古語拾遺をはじめとして民間古老の伝へとしての旧事紀・橘家伝書・其の他諸家の記録である。なほ他国異民族の間に伝へたものも多い。けれども他国にありてはその国が興亡起滅の渦中に出没して来たためにその神伝が殆ど忘失せられて僅に空文を止むるに過ぎない。まことに痛恨事であり愛惜の情に耐へないのであ

333く の 四大象徴

(真横から見た断面図)

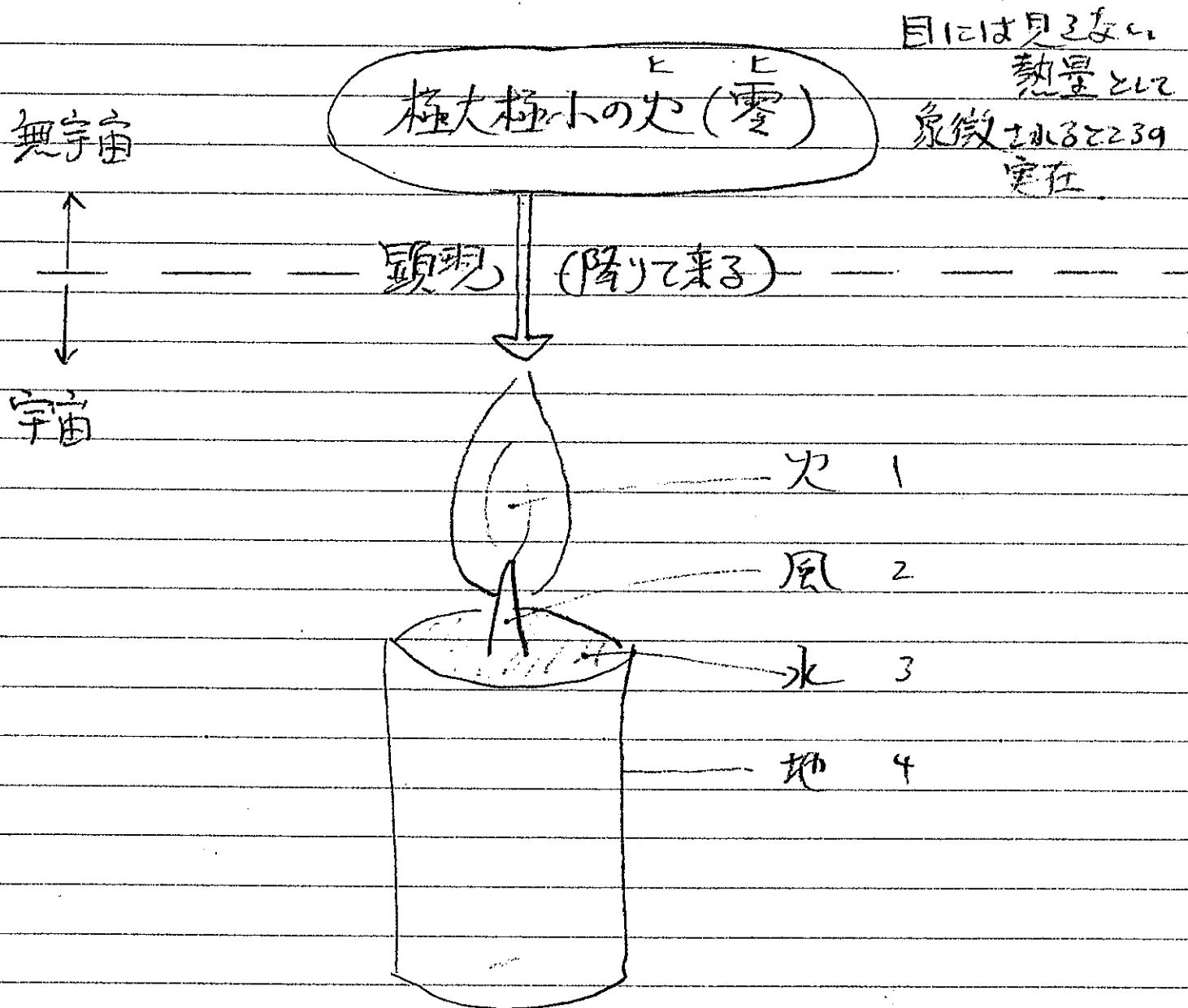
実際に燃えているのは、
気化したパラフィン (気体)

溶けたろう (液体)

芯

333く (固体)

無宇宙の火と宇宙の火



333の炎は、宇宙(第一階層)の火の象徴であり、
宇宙の火は、無宇宙の火が顕現したものである。

→ 333の炎を見ただけで、ここまで連想できるように
なるべきである。

「宇宙の側に存在している火」の、
背景・根源としての「極大極小の火」

→これが大宇宙全体に作用力として遍満して
いる状態を指して、「尽天尽地の火」と称する。

	(多田流)		(西洋流)	諸外国の思想では、 一般に区別されない。
アマツカミ	無宇宙	ヒ 零 (ゼロ)	(真の超越領域)	
月曜に区別、		シジガキ 瑤垣		
ウニツカミ	第一階層	火 (1) とよの あかり	(熱エネルギー)	
		テ垣		ここに「断絶」を想定。
ウニツカミ	第二階層	風 (2) とよの かたし	(気体)	
		中垣	↑↓	相転移のイメージ
人間の領域	第三階層	水 (3) とよの みこみ	(液体)	
		荒垣	↑↓	相転移のイメージ
人間の領域	第四階層	地 (4) とよの よぬ	(固体)	

⇒ 唯物論は (4) のみ。

初歩的な霊肉二元論やアニミズムは (3) と (4) のみ。

一般の古代宗教は、(2) と (3) と (4) のみ。

一神教や仏教では、造物主や如来として、(1) をも想定。

日本神道では、さらに (ゼロ) をも考慮に入れる。

第十一章 山裡の火光

まことに世に餓鬼の騒ぎ畜生の躍るのは何とも耐へがたい。

けれども人間身と云ふのが必竟此の鬼畜の群団であるに過ぎない。

鬼畜群団此は神人。無始劫降出沒浮沈。東西南北十萬億土。往返去來一握塵沙。

それでそれが餓鬼と畜生と修羅と天上と人間と地獄との釜中に乱舞すれば三惡道の妖魔である。

此の妖魔が死ぬとすぐ分解がはじまる。分解すれば醜穢の妖魔が更に醜穢になつて「蛆たかれとろろぎ」目も当てられぬものとなる。そこでそれを焼く。その焼き方で三惡道を脱し六道を出で十界を超え一点昭昭たる仏身と成る。之れが「ナミアムダブツ」の妙徳である。

南無阿彌陀仏。阿彌陀仏身此は人間。之は妖魔群団。妖類魔族必竟神。神魔雜糅三惡道。神魔剖判極樂界。

樂土与魔境在於一几者是神人。

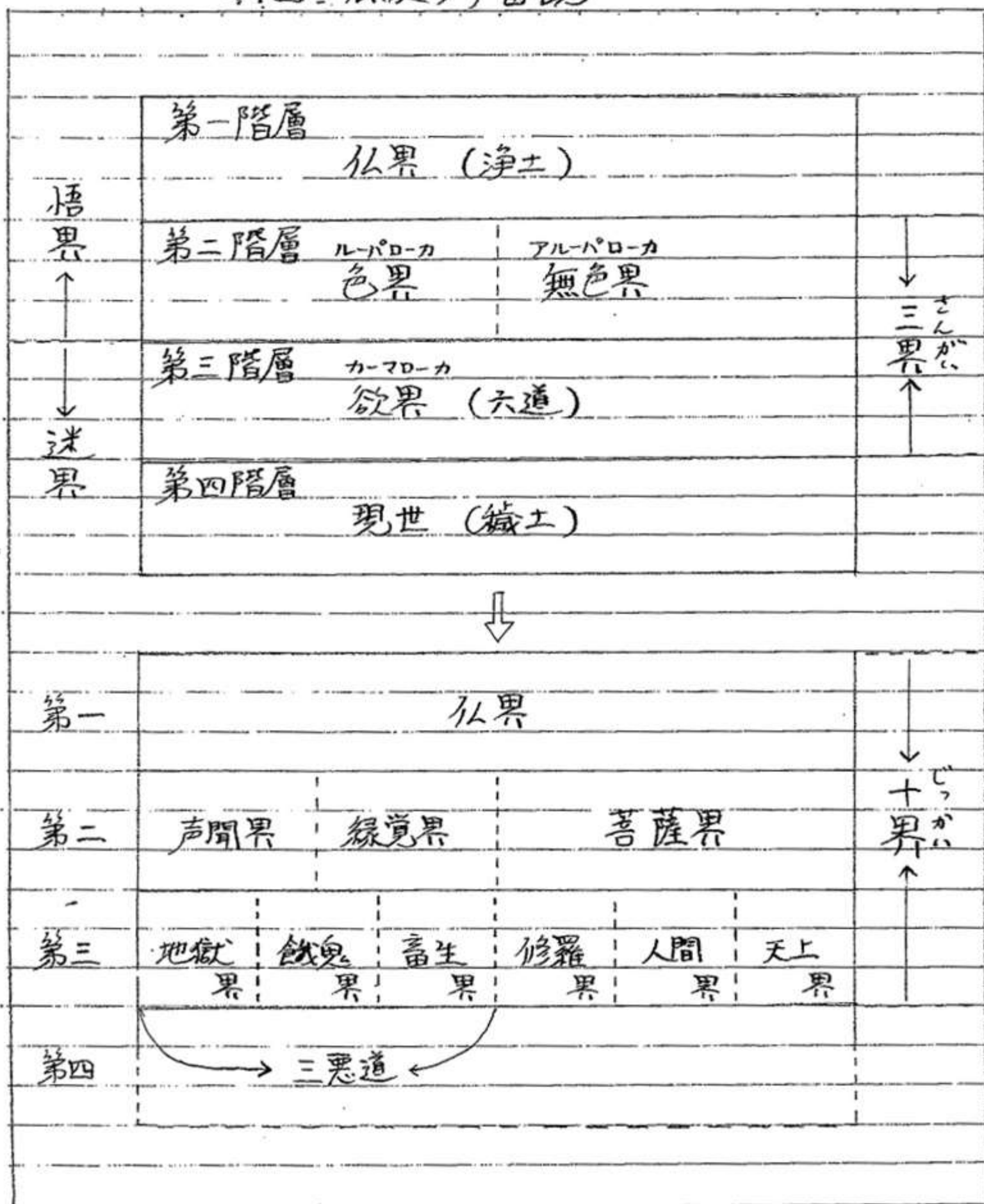
神人と言ふのは「ミコト」であつて古老は「尊」の字を充當てて居る。

具體的には、神話と元型として、
それに神習う形で靈的に焚尽す。

「階層を上昇して」の意味。

「樂土と魔境とが一几に在るは、これ神人なり」

付図 仏教の宇宙観



仏教で言う六道、即ち第三階層。(未来45頁より)



1.	天人界
2.	人間界
3.	修羅界
4.	畜生界
5.	餓鬼界
6.	地獄界

→ 普通の人なら、ミタマツリで
「ヒツミヨイナヤコト」と唱えるべき箇所です。

、畜生道に落ちた故人に対しては、
「ヒトフタミツヨソ イツムユナナソ ヤヨコノヘノキミガヤド」と唱える。



すべて「故人のミタマの境涯」を表わす用語。

神道では、1. と 2. をミタマ。

2-3. と 4. をミタマ。

4-5-6, と 5. をミタマ と言う。

まとめて「三悪道」と称する。

第十二章 一点の往返

十魂尊貴の神身も一度あやまれば餓鬼と成り畜生とも成る。

その餓鬼も畜生も人人が貪慾の魔想に驅られ劣情に溺没してその身を穢しその位を案することから次第次第に墮落するので急転するものではない。従つて鬼畜には悔悟の機が乏しく救出の縁が薄い。所謂「豹変」するものではないから根機強く調伏済度せねばならぬ。その仕方を幽界の方面から教へたのが古老の所云「施餓鬼」である。

それは鬼畜の魔心を和げて神性を發揮させるのに毒物を用ゐねばならぬ秘密法なのである。真に是れ難事中の難事。然うしてその畜生を救ふことは餓鬼よりもなほ一層困難である。まことに畜生なるものは何んとも始末が悪い。餓鬼にはその好む飲食物を餌として誘ひながら供養文を読んで聞かせる。その餌の遣り方がなかなかむづかしい。多すぎれば却つて逃げる少なければ寄りつかない。清ければ離れる。濁つたもの穢いもの曲つたもの悪いもので呼び集める。寄り集つたならば一しよになつて遊びながら飲み食ひをする。その飲食物がみんな腐つて毒気が漲り悪臭が鼻をつん裂く。たまつたものではない。然もそれは夜陰地底で為る。尋常一樣の人には出来ることではない。却つて餓鬼の嘲笑を招く。そこで古老は簡易な形式を伝へて神秘の妙力を發揮させやうとせられた。それは深夜に神文を読みながら河流に筏を浮べ種種様様の飲食物を乗せる。その中央に火を焚く。此の火が飲食物を焼きつくすやうにと心がける。河岸で神文を読みながら清水を灑ぐ。その水は天の水で餓鬼にも飲めるやうに神の靈が満たされてある。それから河の中流まで送つて秘文を乗せ秘文を読みながら神界に送るのであ

と総べて「河施餓鬼」と呼ぶ。

畜生の供養はまた甚其の趣を異にする。全くの秘密法で筆録を許されない。それで先聖は唯仏名を称へまつれ神命を仰ぎまつれよと教へさせられた。その伝ふるところの仏名秘言は所謂「ダラニ」であり神文である。

此の秘密はひとり神人の主るところではあるが易行法として口授されたノリトとかダラニとか称する秘言は誰でも称へつつ簡易な行事を為ることが出来る。神数として天津祝詞の太祝詞に伝へた「一二三ヒフミヨイムサヤ四五六七八九十」を「ヒトフタミツヨツイツムユナナツヤヨココノヘノキミガヤド」と称ふるは畜生救済の供養文である。之れを約めれば「ヒッフハッフウヤ」であり更につめたのは「ヒルブハルバ」又更につめては「ヤウエ」であり「ウワイ」である。さうして窮極に至れば「ヒ」である。その「ヒ」とは一で零で無限で唯一点の往返である。

第十二章 終

以上 昭和廿二年八月十八日 筆録

第十三章 如是の零境

貪慾の餓鬼も破倫の畜生も觀じ来れば人間自身が害虫毒蛇であるに過ぎない。

「盗心有るが故に盗難有り」まことに「盗人を捕へて見れば我が兒なり」善惡も美醜も正邪曲直も必竟此れ是の(ヒ)である。如是のヒ如如来するは神人仏陀であり、窮迫困厄しては幽鬼妖魔と化る。

43頁 第十一章 山裡の火光の解説

さて、本文の2行目では、『人間身が鬼畜の群団である』と表現されているが、まずここで言う「人間身」とは肉体身に限った話ではなく、^{ミクマ}身魂（ここでは、主として、ミクマ）をも含めた概念である。また、ここで言う「鬼畜」とは、1行目の「餓鬼」と「畜生」を一つにまとめただけの用語である。

次に4行目では、『これ（鬼畜の群団）が「餓鬼と畜生と修羅と天上と人間と地獄との釜中に」乱舞すれば三悪道の妖魔である』と表現されているが、第一に、「餓鬼と畜生と修羅と天上と人間と地獄」とは、仏教で言う「六道」のことであり、六つ合わせて第三階層全体のことである。（付図参照）

（と言っても決して「第三階層が空間的に六つの領域に分かれている」という意味ではない。実際には、「第三階層における死者のミクマの境遇」を六段階に分類しただけ

の用語である。つまり神道では「底どく、粒たつ、泡さく」と大きく三分した「故人の境地」を、もう少し細かく分類しただけのことであり、決して、あの世のどこかに「地獄という場所」が実在している訳ではない。))

また、第二に、「三悪道の妖魔」とは、幸52頁の末行で言う
マガツビノムシ
「妖魔群」の同義語であり、どちらも「人間身を構成する数々の要素が、中心の統率に従うことなく、それぞれ勝手に動いている状況」を指した用語である。

ちなみに、「三悪道」とは、本来の仏教用語としては、六道のうちの下位三道（下から順に、地獄道、餓鬼道、畜生道）を指して言う用語だが、ここでは8行目にあるとおり、単に「極楽界」の対義語として、また9行目の「魔境」の同義語として用いられている。

従って 4行目の一文を単純に意訳すれば、

『人間身が、中心の統率に従わずに第三階層の中を

勝手に動き回っている時、その人間身は幽界魔境の妖魔

も同然である』ということになる。

マガツト

なお、ここで言う「妖魔」もまた、「人間身」と同様に、

霊的な構成要素まで含めた概念である。（と言うより、むしろ

こちらの方が主である。）

よって、6行目の「それを焼く」という用語もまた、当然ながら、

単に火葬場で遺体を焼却することだけを指しているのでは

ない。むしろ霊的な「火」によってそのミヤマを焚尽すること

即ち、^{ハラヘ}「火による寂」の方を意味しているのである。

ハラヘ

そうした寂のやり方次第で、故人のミヤマは『三悪道を

脱し、六道を出て、十界を超越』で、仏身（神身）を

築くことができる。それが、「ナムアミダブツ」というコトヤマの

はたふき

妙徳（作用力）だと言うのである。

（ちなみに 十界の下位部分が六道であり

六道のそのまた下位部分が三悪道である。）



無論、神道にも同様の作用力を持つコタマは数多く
伝わっているので、神葬祭においては、それらのコタマを
存分に行使すべきである。

るものの如くである。今之を記すもまた婆心。若幸に便宜を得る人も有らば、ひとり予の喜びのみではない。

第十二節

經も無く緯も無く、始も無く終も無しとは、物無きものである。之を古老は、「火」と教へて居る。その歌に、燃ゆる火も、取りてつつみて、ふくろには、入ると言はずや。さどくともなきに。

と有る。

之は「ミタママツリ」の祕言で、之に依つて、日本民族が死者を葬るには、如何なる祭式を用ゐたかがわかる。往く人の、心知れらば、かにかくに。とく歸りませ。いつかしがもと。

と傳へたのも、亦等しくそれである。

先師は、御尊母を葬りまつるに、其の初眞宗佛式に依られた。

それを見て、脩禊の同人であつた栃木縣の神職伊藤桑三氏が激怒し、遂に稜威會を脱退した。惜しいことをされたと、私は今でも時時想ひ出すのである。近頃でも、氣の早い人たちが、自分の知らぬことを他人が爲れば、深くも究めず、親しくも聞かずに、漫然と罵聲を揚げたり、卒然と嘲笑を放ちたり、道に志すものの斷じて爲すべからざる輕浮盲動を爲て居るさうだ。

そのやうな人は、天鳥船神の發聲を忘れてでも居るのか、少くとも怠つて居るのであらう。早く反省して、日夕二回の拜神を勵み、神の御聲の中に、各自各自の日を明にすべきである。

さう言ふ意味で、天鳥船の神事を勵む。勵み勵みて、「ホ」の妙音に到達する。すると、身心一圓の火と成つて、此ここに、火火出見尊の大御寶としての我であることを悟證するのである。ホの行事が終つたならば、また出した足を元に引いて直立する。

直立して御神名を奉稱することは前と等しいが、此の稱へまつる御神名に依つて、各々其の神を拜するので、神名奉稱の祕事が行はれる。それを終ると、次ぎは、前前回と等しく左の足を一步出して、

「サ」の發聲を爲るのである。此の時だけは、手を前方に突き出したる時に十指を開く。サの音は、ホよりもより以上に分れ出で散り行く響きであるから、特に注意して、堅く強く深く、體としての我を築きつつ進まねばならぬ。で、必先づエーイッと強く引き締めてから、サーッと出すのである。

之を繰返し繰返しつつ、神業建設の妙趣を悟る。

サくらばな、

サきの

サかりを、あまをとめ、よに

サちあれと、あ

サつとめする。

と傳承したる壽詞が、「分魂統一、建業立勳、福德増進、壯快全身」との意で、幸幸満ちたる身を築かしむる「石長比賣・木花咲耶比咩」の神言靈であるのも、神音としての「サ」の妙用を現するからである。

此のやうに、三段の發聲が終ると、また左足を元に返して、正しき直立の姿勢で御神名を奉稱する。さうし

て、此の行事の結果を、改めて、其の身の態度姿勢と發聲とで立證する。之を、

「天津神輪・國津神輪」の祕事と稱へて、神國築成の天津宮事で、人間身として天津宮事に仕へまつるものである。それを、「詞」として現はせば、

ひとことの、かつらぎぬしや。かみまもる、もりのさかきを、わがきみの、みはかしにして。うなねつく、わがうじものよ。しづはたの、ぬさのしづりよ。みほぎする、けふのよきひよ。ももことの、にはのこすずめ。ちちことの、かはべのちどり。なにすとか、たちはさわげる。けふのよきひに。

であり、漢字で書けば、

一圓一音昭昭琅琅。即時救出六道魔界。神魔剖割在於一几。之是 日本天皇 教矣。

ともならうか。固より宮事を其のままに説明し得るものではないから、唯僅に仰ぎまつる手がかりにもと思ひて記すのみである。

第十三節

天津宮事の一つに、「ヌサ」の祕事が有る。ヌサと云ふ詞は、「アマノミナカヌシ」と稱へまつるに等しき神音で、體と用と體用不二なる事理とを教へられたので、現象世界と本體零位との關係を示し、兼ねて宇斗の祕を傳へられたのである。

ヌサの「ヌ」は、溫むので、盜むので、野で、束ぬるので、總ぬるので、統治し統率するもので、又、產出者

なのである。さうして、それは、「ヌシ」として、人知らぬ「ウシ」で、必竟「ウ」と呼ぶところの黒色黒光水晶宮殿なりとの義である。

ぬばたまの、うのはねごろも、とりよそひ、うとのみやにし、ひとのすみたる。

で、此の「ヌ」は、ウに對しては用であるが、サに對しては體である。さうして、それが、ミナカヌシのヌであると共に、ミナカヌシの五音を總括したる音である。

それから、その「サ」は、「アマ」に當るのである。「サ」とは、細かく割れて森森羅羅萬物萬象と現出するもので、神の雄走ヲバシリであり、人の事業であり、總べてのものの氣息イキである。古老は之を嘆美して「アマ」と稱した。先師は、アマノミナカヌシと稱へまつる大御名を、特に一般人に解り易いやうに説明されたが、今それを搔摘んで白しますと、

「都べてのものは、中心と外廓とから成り立つて居る。が、ただ見ただけでは、一つの物で、中心が何こに在るのか、或は無いのか、外廓と中心との區別が何こで付くのかも分らぬ状態である。單に客觀しただけでは、何と判別の仕方無いので、アーと驚嘆するばかりである。けれどもが、よくよく觀察すれば、「マ」として立派な統一を保ち、發展し歸結するミタマである。まことに驚嘆すべきミタマの存在であるからとて、日本民族は、それを「アマ」と讚美した。そのやうに立派な統一體の統一體たり得るのは何故であらうかと、その内容を検討すれば、堅く締れる「ミ」としてのミタマが内在して居る。その内はまた更に、光り耀くミタマで、「ヌシ」で「ウシ」である主魂が、全體を主宰統一して居る。其のやうに、層を成して内から外に外にと擴がつたものを、中心で引き締めて逸脱することを許さない。之は何如なる物も悉皆然うなので、全宇宙としてもまた固より其の

通りである。何如に微細な物でも、何如に廣大なものでも、一貫した筋道で出来上つて居る。

之を日本民族の詞で「アマノミナカヌシ」と稱へて、「カミ」と白しまつるの義である。圓輪を以つて圖解すれば、外が「マ」で、その内が「ミ」で、その内は「ヌ」で、そのまた内は「シ」と呼ぶ。すべて四重で、その全體が完全なる統一體を成して居る。

物として中心の無いものは無い。中心に統一せられて初めて存在し得るのである。大宇宙の然る如く、小宇宙の然る如く、國家も必然るべく、全人類世界も亦必然るべきものである」とのことである。

けれども、此の御解説は、人を導き世を教ふる便宜の爲であることは白すまでもない。人に依つて大道悟證のたよりを得んと願ふものは、此の點を忘れぬやうにせねばならぬ。私はかつて、先師におたづねしたことがある。「先生には、

大日本天皇 の大御寶として、全神教趣大日本世界教を御唱道になられますが、若も、漢民族としてならば、何う云ふことになりませうか」と。すると、「國がかはれば、またまるで別だよ」と。

相互拍手。師資哄笑。記紀傳統。一圓一音。過去無師。將來無資。

よしあしの、へだてもあらず、あをみたる、ひろのせばしと、よしきりの鳴く。

「ヌサ」と「アマノミナカヌシ」とが等しき神音だと云ふ。或は、人の疑ひを招ぐかも知れぬ。

「ヌサ」の音義は、これまでに略、説明し得たと思ふのであり、「アマノミナカヌシ」の音義も、第一章に概説したのであるが、なほ重ねて、之をうかがひまつることにしよう。

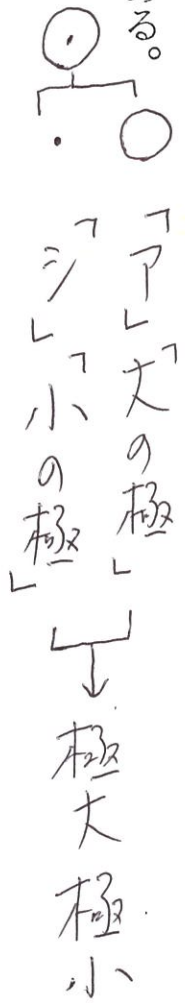
「ア」に就ては、前に磐境曲を説く際に述べたやうに、いまだ物を成さず、國を成さず、人を成さぬので、形

としてならば、何う書きやうも無いから、假に○と書く。それを詞としては「ア」と呼ぶ。が、此の○は、一切合切を包括して圓滿具足せる象である上からは「マ」と云ふのである。外から見たでは「ア」と驚嘆するのみであるが、その内を觀れば「マ」と呼ぶミタマであると云ふので、此の二音を合せて「アマ」と呼ぶのは、大宇宙の内容外觀を一語に包括し説明したのである。で、その

「アマ」なる大宇宙の大宇宙たるは、更にその内容が「ミナカヌシ」であるが故である。そのまた「ミナカヌシ」の展開たる「アマ」を産出するものは、「ノ」と呼ぶミタマである。そのやうな意味で、「アマ」と「ミナカヌシ」とを繋ぐに、「ノ」の音を以つてしたのである。此の「ノ」は單なる接續詞ではない。それから、その「アマ」と呼ぶところの大宇宙は、「ミ」と云ふ實體であり、其の實體たる「ミ」は赫灼と光り耀いて居る。大宇宙の然る如く都べてのものの中心は皆悉照り耀いて居る。美しく照り耀くものは「ナカ」であり、そのまた赫灼たるわけは、その中に、他を引き締め続べ治むるミタマとしての「ヌ」が在るからである。「ヌ」は先に説明したやうな音義で、「ノ」に等しくして僅に異なるのである。

此の「ヌ」の中には、又更に、全體を主宰し統率するミタマが在る。それは「シ」である。「シ」とは、治であり、知であり、主であり、人であり、死である。此の五字は皆共に「シ」と訓む。則、生死一貫の義で、之を形に書けば、亦等しく○で、説明すれば零であり一であるので、**極**である。

「ア」としての極は**大の極**であり、「シ」としての極は**小の極**である。さうしてそれが共に**中心**である。之を圖解すれば○で、**圓輪**を以つて「ア」を示し、**一點**を以つて「シ」となす。之を「アシ」の祕言と稱へて、「ウマシアシカビヒコチ」の産魂言である。



小の極が中心だと云うことは、讀者も容易に領くであらうが、大の極が中心だと云ふことは、或は一寸躊躇されるかも知れぬ。けれども、大であれ小であれ、極と云ふからには、唯一點であること固よりで、唯一點であることと云ふものは、中心であることまた固よりで、唯一無比待對無きものとは、又唯大宇宙在るのみであることまた固よりで、此の極たる中心とは、唯是大宇宙あるのみである。之を畫いて○となすことまた固よりではないか。此の事實と眞理とが、重重無盡無量の存在と成つて生滅起伏する。それを現象世界とながめては「アマ」で、其の現象を發現する本體を究め來れば「ミナカヌシ」で、本體と現象との分際を究明し得れば、おのづから本體と現象との牆壁は撤去せられて、一圓一音昭昭琅琅、日神は天窟戸を出でさせ給ふなりと、人は拜みまつるのである。

「アマ」を現象世界だと云ふのは、「ミナカヌシ」に對するが故なので、その「ミナカヌシ」とは、大裏觀したる神界で、それをそのまま大表觀すれば「アマ」である。それ故に、天地初發としての「アマ」は、「ミヅ」の大平等觀で、稜威赫灼一圓晃耀の象である。それで、「ミヅ」に對すれば「アマ」が本體となるのである。

「アマ」を別の詞では、「日神の御田」と稱へまつりて◇と描き、また田とも、品とも描く。それは、器を産出する大海で、大虚空であるとの義で、「ヒツキ」と呼ぶ。此の「ヒツキ」の中にして、神子^{カミノコ}は生れさせ給ふ。その「ヒツキ」とは、○●であり○であり、「カミノコ」とは、▲であり「ミヅ」であり、稜威雄走命^{イツノラバシリノミコト}と稱へまつるのである。

「ヌサ」の祕事を祭儀として行ずる爲に作られた神器が存る。之は、圖解を要するのだが、兎に角、外に顯れぬ中心が在る。それは、「ウ」と呼ばれるのであり、外に細かく分れた部分があつて、それを「サ」と呼ぶ。さ

うして、此の「サ」と「ウ」とを一つに結び止めた部分がある。それをば「ヌ」と呼ぶ。之を全體として「ヌサ」と稱するのである。

此の「ヌサ」の神事は、祓の神の教へとしては、「天津菅曾を本刈り斷ち末刈り切りて、八針に取り辟く」もので、禊の神の教へとしては、「天津金木を本打ち切り末打ち斷ちて、千座置座に置き足らはす」もので、祓の神は、罪障を焚盡して火の海と成し、禊の神は、天湍河のミモヒを灑ぎて神界樂土を築き成すのである。

古老詠ふて云はく、

海は逃げ、山も躍ると、古の、ふみにぞ書ける。日の神の、わざこそ成れれ。月夜見ツキヤミの、矢こそは立てれ。

白玉の、眞玉の中に、眞つぶさに、統一る中に、神こそは、鎮り伊坐せ。日止こそは、止まりてあれ。日止知らず、國は安けし。神守る、嶋ぞ統一る。海はなぎ、山靜なり。やまと國原。

と。

斯くて、祓の神とは、黄泉大神ヨモツ オホカミとして、根の國・底の國を治らす伊邪那美神にてましまし、禊の神とは、三貴子を生みまし給ふ中津國の主神伊邪那岐大御神にてましますことを明らめ得るのである。

今年來て、我また息ふ、綿津見の、いろこの宮は、神の常宮。

第十四節

朝早く目の覺めたままに、そのままに、硝子戸越しの外を見ると、柳の絮綿が・之を綿と呼ぶことは、奉天の

作用とて
の「哭」.

→

「スリカタメテスルアマノヲ

とも秘するので、物で云へば然

氷で、究極の靈（ひ）で、根本

で、最大最小の一で、統治統率

大で、極小で、窮数で、満数で

の色を云へば緑で、その相を云

響を云へば一音響で、人の聴き

通で、本打切り未打斷ちたる天

非で、否で、非否で、靈（び）

で、産魂（むすび）で、高皇產

魂で、玉留魂で、高魂で、神

道反玉で、死反玉である。

日本書紀一書目

又勅曰。以言高天原所御產。

庭之德。亦當衡於吾民。

223 224 225 226 227 228 229 230 231 232 233 234 235 236 237 238 239 240 241 242 243 244 245 246 247 248 249 250 251 252 253 254 255 256 257 258 259 260 261 262 263 264 265 266 267 268 269 270 271 272 273 274 275 276 277 278 279 280 281 282 283 284 285 286 287 288 289 290 291 292 293 294 295 296 297 298 299 300 301 302 303 304 305 306 307 308 309 310 311 312 313 314 315 316 317 318 319 320 321 322 323 324 325 326 327 328 329 330 331 332 333 334 335 336 337 338 339 340 341 342 343 344 345 346 347 348 349 350 351 352 353 354 355 356 357 358 359 360 361 362 363 364 365 366 367 368 369 370 371 372 373 374 375 376 377 378 379 380 381 382 383 384 385 386 387 388 389 390 391 392 393 394 395 396 397 398 399 400 401 402 403 404 405 406 407 408 409 410 411 412 413 414 415 416 417 418 419 420 421 422 423 424 425 426 427 428 429 430 431 432 433 434 435 436 437 438 439 440 441 442 443 444 445 446 447 448 449 450 451 452 453 454 455 456 457 458 459 460 461 462 463 464 465 466 467 468 469 470 471 472 473 474 475 476 477 478 479 480 481 482 483 484 485 486 487 488 489 490 491 492 493 494 495 496 497 498 499 500 501 502 503 504 505 506 507 508 509 510 511 512 513 514 515 516 517 518 519 520 521 522 523 524 525 526 527 528 529 530 531 532 533 534 535 536 537 538 539 540 541 542 543 544 545 546 547 548 549 550 551 552 553 554 555 556 557 558 559 560 561 562 563 564 565 566 567 568 569 570 571 572 573 574 575 576 577 578 579 580 581 582 583 584 585 586 587 588 589 590 591 592 593 594 595 596 597 598 599 600 601 602 603 604 605 606 607 608 609 610 611 612 613 614 615 616 617 618 619 620 621 622 623 624 625 626 627 628 629 630 631 632 633 634 635 636 637 638 639 640 641 642 643 644 645 646 647 648 649 650 651 652 653 654 655 656 657 658 659 660 661 662 663 664 665 666 667 668 669 670 671 672 673 674 675 676 677 678 679 680 681 682 683 684 685 686 687 688 689 690 691 692 693 694 695 696 697 698 699 700 701 702 703 704 705 706 707 708 709 710 711 712 713 714 715 716 717 718 719 720 721 722 723 724 725 726 727 728 729 730 731 732 733 734 735 736 737 738 739 740 741 742 743 744 745 746 747 748 749 750 751 752 753 754 755 756 757 758 759 760 761 762 763 764 765 766 767 768 769 770 771 772 773 774 775 776 777 778 779 780 781 782 783 784 785 786 787 788 789 790 791 792 793 794 795 796 797 798 799 800 801 802 803 804 805 806 807 808 809 810 811 812 813 814 815 816 817 818 819 820 821 822 823 824 825 826 827 828 829 830 831 832 833 834 835 836 837 838 839 840 841 842 843 844 845 846 847 848 849 850 851 852 853 854 855 856 857 858 859 860 861 862 863 864 865 866 867 868 869 870 871 872 873 874 875 876 877 878 879 880 881 882 883 884 885 886 887 888 889 890 891 892 893 894 895 896 897 898 899 900 901 902 903 904 905 906 907 908 909 910 911 912 913 914 915 916 917 918 919 920 921 922 923 924 925 926 927 928 929 930 931 932 933 934 935 936 937 938 939 940 941 942 943 944 945 946 947 948 949 950 951 952 953 954 955 956 957 958 959 960 961 962 963 964 965 966 967 968 969 970 971 972 973 974 975 976 977 978 979 980 981 982 983 984 985 986 987 988 989 990 991 992 993 994 995 996 997 998 999 1000 1001 1002 1003 1004 1005 1006 1007 1008 1009 1010 1011 1012 1013 1014 1015 1016 1017 1018 1019 1020 1021 1022 1023 1024 1025 1026 1027 1028 1029 1030 1031 1032 1033 1034 1035 1036 1037 1038 1039 1040 1041 1042 1043 1044 1045 1046 1047 1048 1049 1050 1051 1052 1053 1054 1055 1056 1057 1058 1059 1060 1061 1062 1063 1064 1065 1066 1067 1068 1069 1070 1071 1072 1073 1074 1075 1076 1077 1078 1079 1080 1081 1082 1083 1084 1085 1086 1087 1088 1089 1090 1091 1092 1093 1094 1095 1096 1097 1098 1099 1100 1101 1102 1103 1104 1105 1106 1107 1108 1109 1110 1111 1112 1113 1114 1115 1116 1117 1118 1119 1120 1121 1122 1123 1124 1125 1126 1127 1128 1129 1130 1131 1132 1133 1134 1135 1136 1137 1138 1139 1140 1141 1142 1143 1144 1145 1146 1147 1148 1149 1150 1151 1152 1153 1154 1155 1156 1157 1158 1159 1160 1161 1162 1163 1164 1165 1166 1167 1168 1169 1170 1171 1172 1173 1174 1175 1176 1177 1178 1179 1180 1181 1182 1183 1184 1185 1186 1187 1188 1189 1190 1191 1192 1193 1194 1195 1196 1

二八」の「イナボ」であるか。

て宇宙を築き、宇宙を統治す。

齋庭（ゆには）とは「三夕」

之れを「メノカミワザ」といふ。

で、「イナシヨメシヨメ」

醜女で、醜の又醜の醜の極で

「亦當舞於吾兒」とは、十

しとの義である。

皇子皇孫一音誓。

隨處起滅一天命。

10.10.00 10.10.00

う。う。う。う。う。

From the above, it is seen that the

たる正しき資料にして

樹木の結ひたる身なりとの義

極小の結ひたる身なり。

之れを一カミナガラ」と

「カミノマニ」にして神

以上

昭和十一年七月十四日夜半

「ヒ」の意味とその表現について

零——時空や万物を構成する根本資料としての「實在」そのものを指す名称。

日——その「實在」が「中心」として機能している際の名称。「統一体」全体を指す場合もある。

↓極、唯一点、種子、、光、日神とも。

火——その「實在」が単なる「資料」としてしか機能していない状態の名称。

「中心」に付随してその「外郭」を構成するか、さもなくば遊離して「魔」^{マガツヒ}となる。

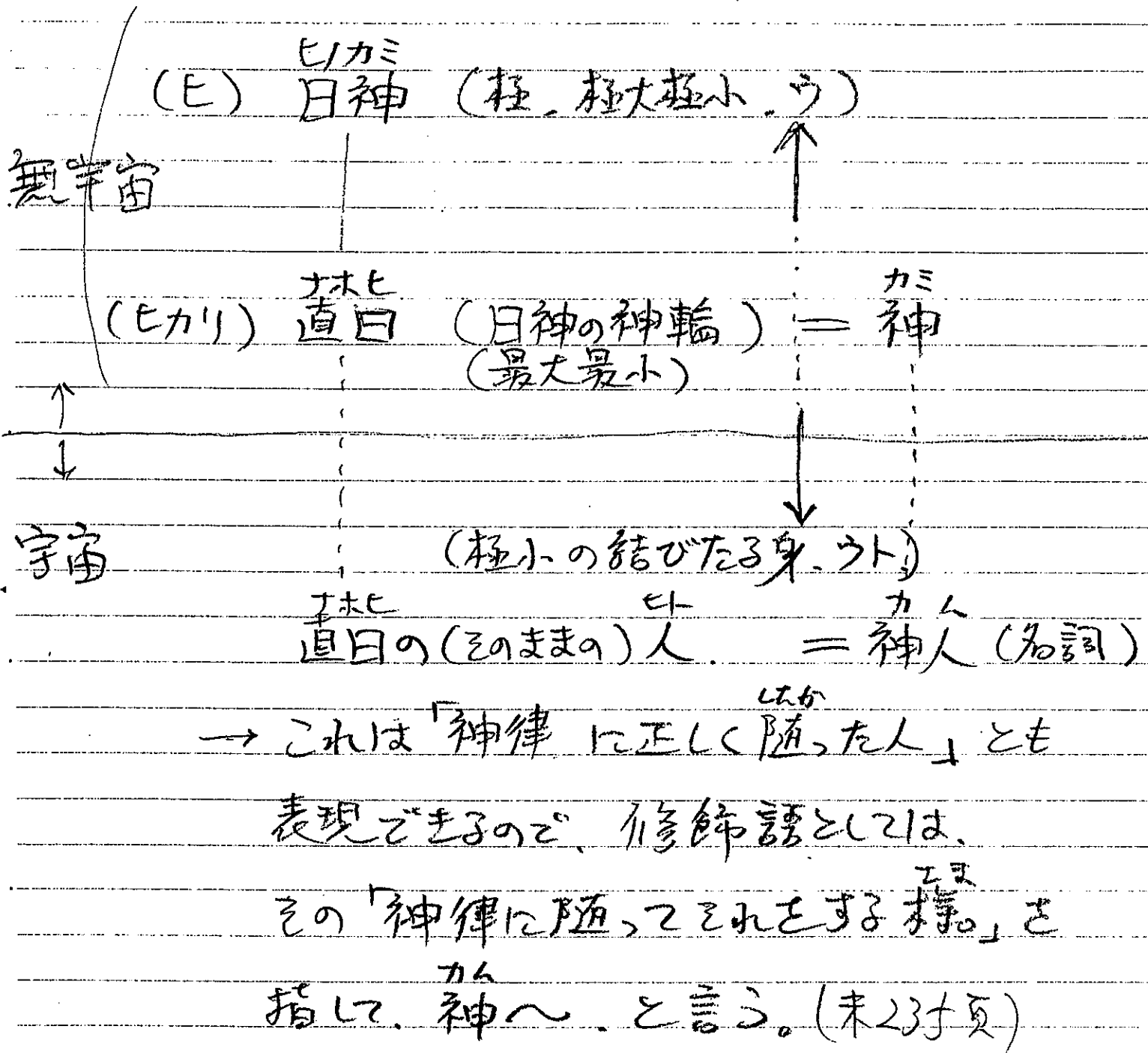
イナボ——「種子」と同義。極大極小の零（ヒ）のことを「種子」とも言い、「斎庭之穂」（マツリノニハの

イナボ）とも表現する。

イナバー正しき資料のこと。

万物は「中心」より出でて「中心」に帰る。その「中心」を「ヒ」と呼ぶが、同時に、その出たり帰ったりする際の「一貫した筋道」をも「ヒ」と称する。

人間にこの「ヒ」を教えるが、^{フルタモノミコト}振魂尊こと天照大御神の御神徳である。



(ウト、神聖、神人、カム、はほぼ同義語)

天祖の作用力を天照坐皇大御神と云う。

その作用力を二つに分ける場合

大宇宙を領域として分ける方法が二通りあるので、

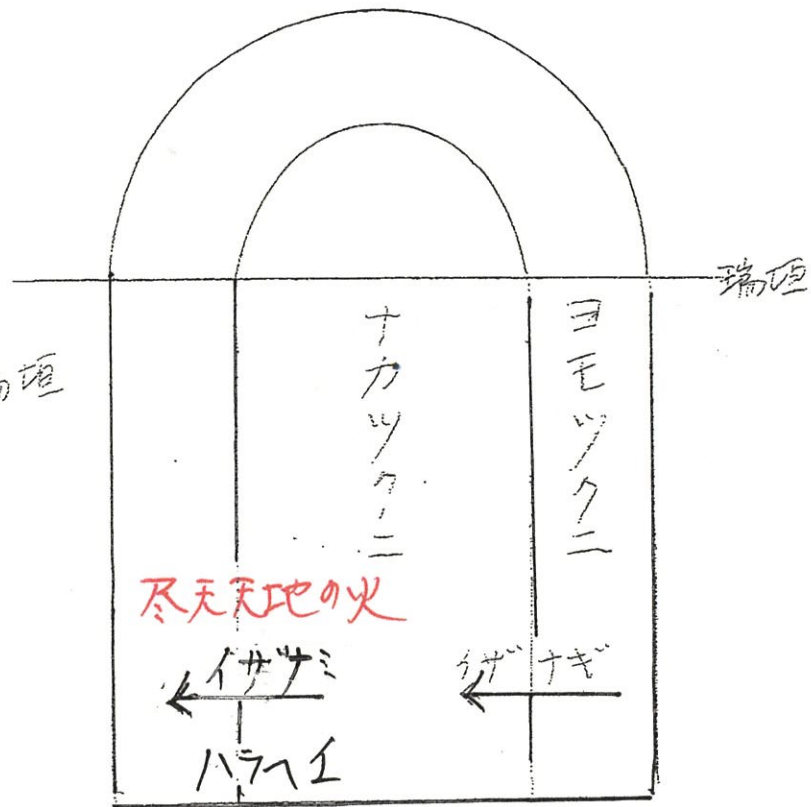
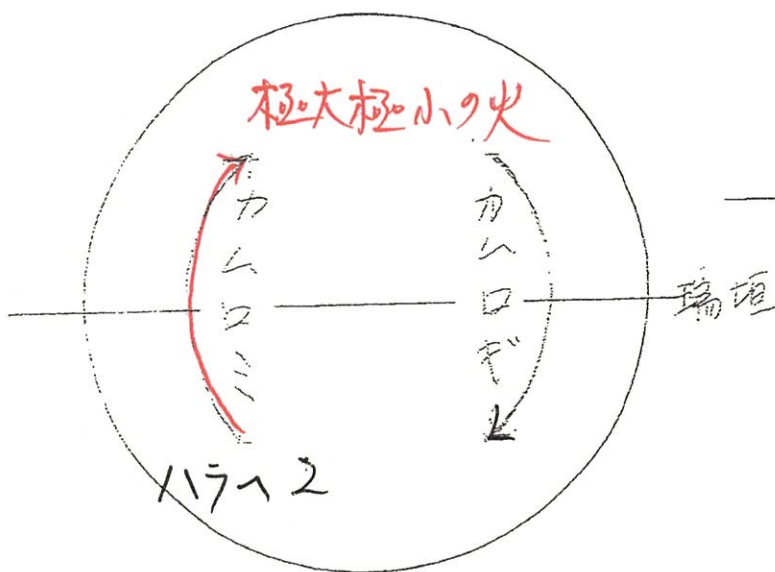
それに応じて、作用力の分け方も二通りあり、

それぞれに別個の神名が当てられている。

ミタマツリ

1. 上下にわけける。

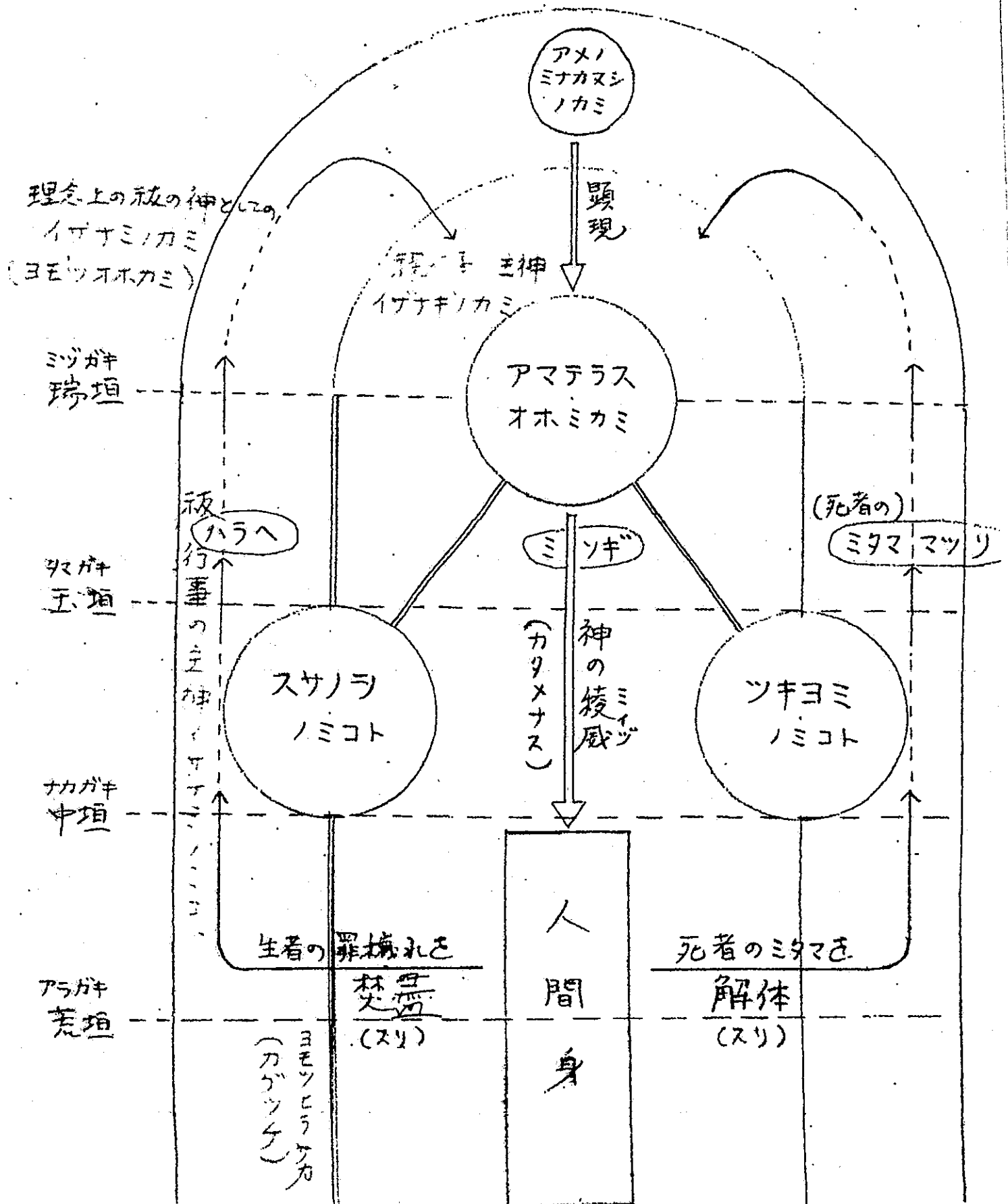
2. 内外に分ける。



上から下へ カムロギ
下から上へ カムロミ (スリ)

カタメナス
外から内へ イザナギ
内から外へ スリイザナミ

(加筆版)
 三の二



「敬神」であることは、次ぎの「祓言」に依つて知ることが出来る。

「祓言」
ハラヘコトバ

マキリツドヘルヒトビト クニツチヤマカハ クサモキモ ソラユククモモ ツチクゲルムシモ アメツチノアリノコトゴト ケフノハラヘノミマツリニ オノモオノモ
参集閑留人。国土山河。草木。空行雲毛。地潜虫毛。天地乃在乃尽。今日乃祓乃御祭爾。各自各
ヤマテオカシケム クサグサノトガトイフトガ ツミトイフツミノ アカトケガレトヲ ハラヘヤラヘキヨメタマフ カミノカミワザ カミコトタマヲ ツツシミカシコミヲロガ
廻犯計牟。雑雑乃尤云尤。罪云罪乃。垢斗穢斗乎。祓却閑清給布。神乃御惠。神言霊乎。敬美畏美拜
トマラス 斗白須。

伊宇袁衣耶。

宇斗乃宮。宮斯呂築成住我乎。神乃我叙斗。神知須邇邇。神乃神輪叙晃耀赫灼矣。

阿知米。

阿知米。

阿宇袁衣耶。宇。宇。宇。宇。斗。宇斗。宇。

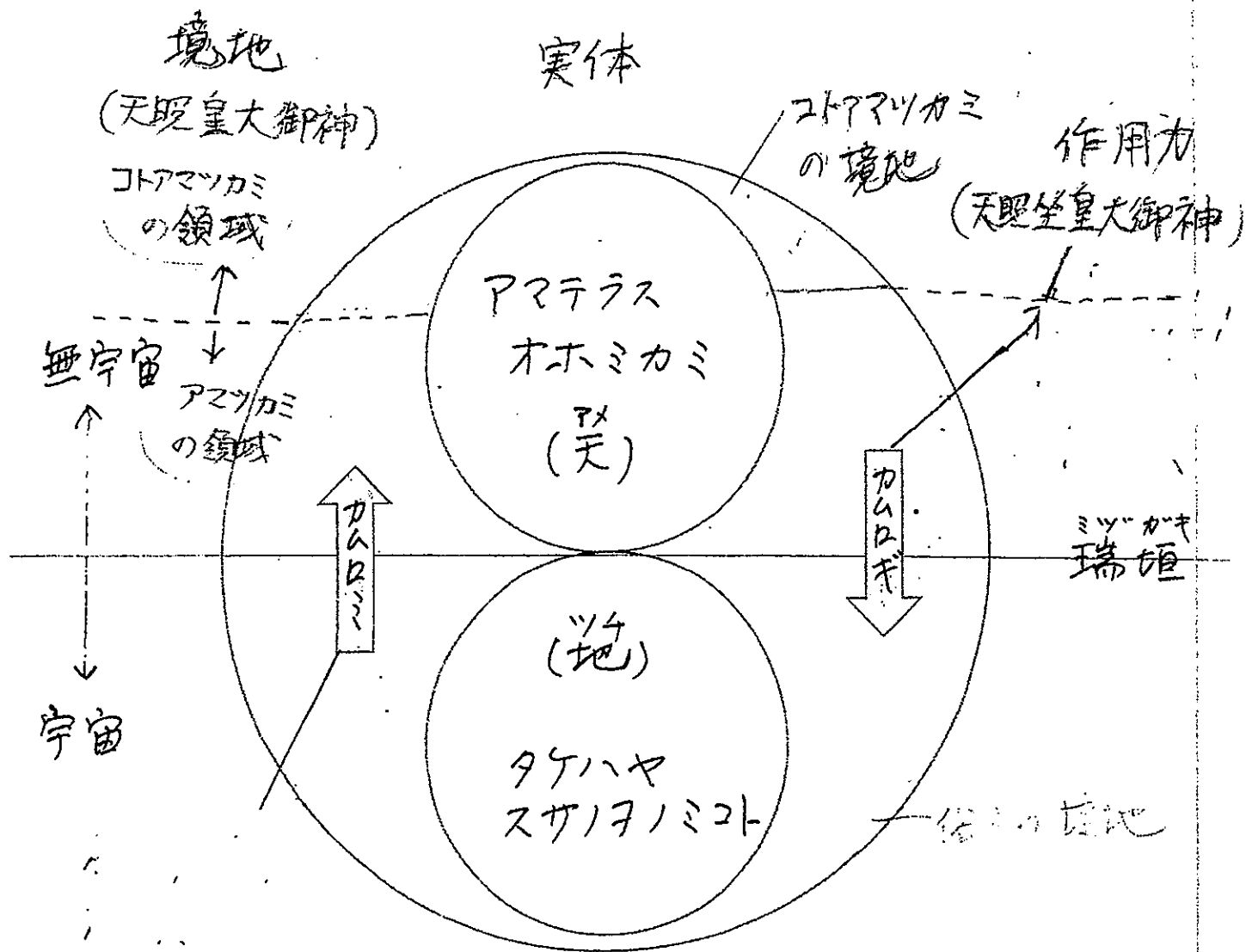
カク ウシナヒテバ アメツチノアリノコトゴト ケフヨリハジメテ ツミトイフツミハアラジト ハラヘヤラヘタマフコトノタフトサヲ カシコミカシコミテ
如此久失氏婆。人天万類尽天尽地。今日以降。罪止云布罪波不在止。祓却給事乃尊乎。恐美惶美三

マツリ キヤマヒマツリ マツリマツルトマヲシマツル アマテラスオホミカミ カムロギノミコト カムロミノミコト タケハヤスサノジノミコト ト オホミナハタタヘマツリ
拜。奉感謝。奉 祭止奉白留。天照大御神・神漏岐命・神漏美命・建速須佐之男命止。大御名波奉称コ

オヤアメユヅルヒノアマノサギリクニユヅルヒノクニノサギリノミコト カシコシ
但天讓日天狭霧国禪日国狭霧尊。畏。」

美生 幼也 力

祓いの神名の概念図



全部アマツカミ (ウツシオミ) のヒノカミ

祓いの段階では、視点が宇宙の側にあるため、

意識としても、^{アメ}天と^{ツチ}地の二項対立が成立する。

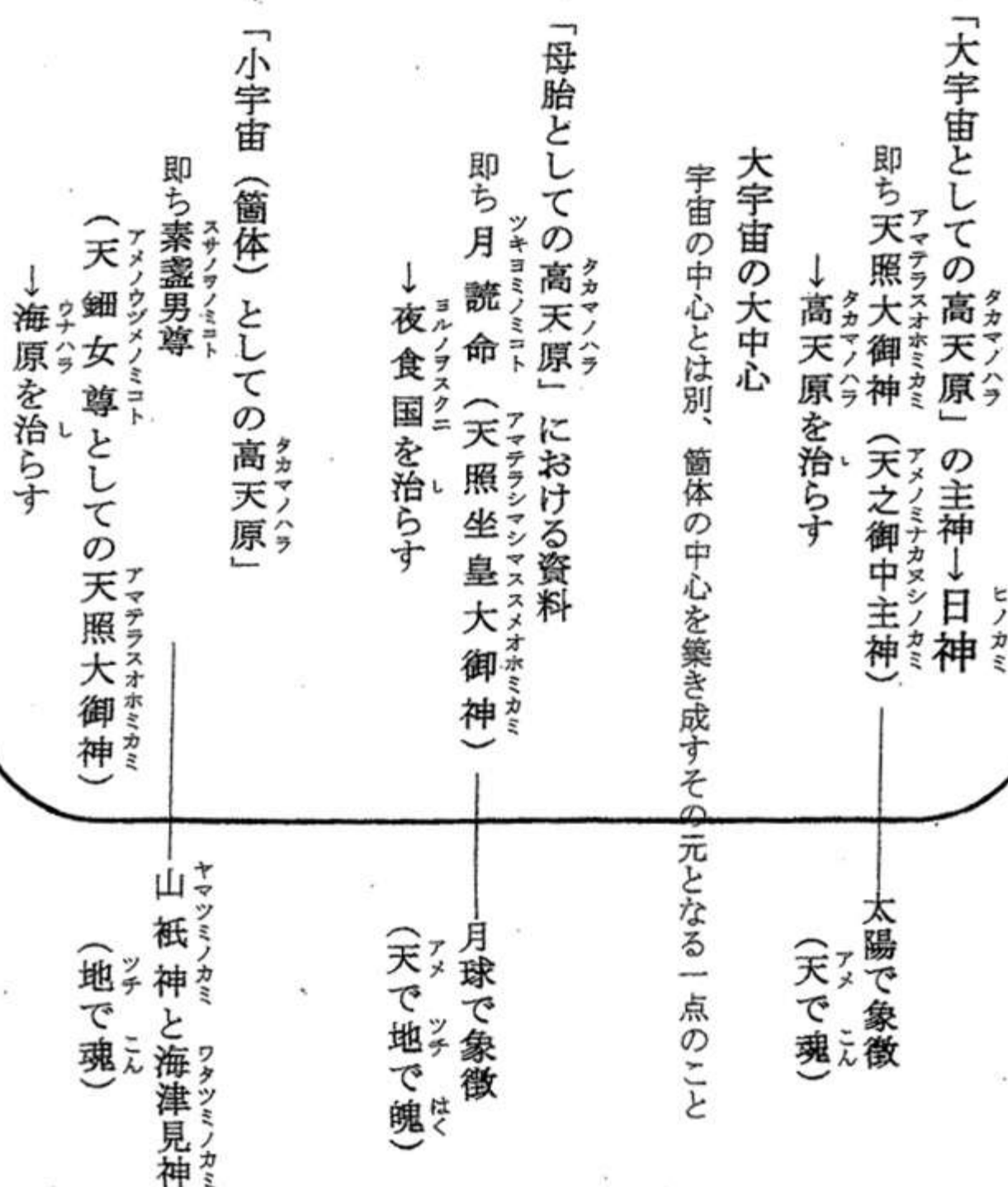
(無宇宙の側から見れば、^{ツチ}地もまた^{アメ}天の一部でしかなく、そもそも二項対立の図式は成立しない。)

ヒノカミ
高天原と零神と「ヒメの秘事」

「ヒメ」 (「メ」、母胎、イノチ)

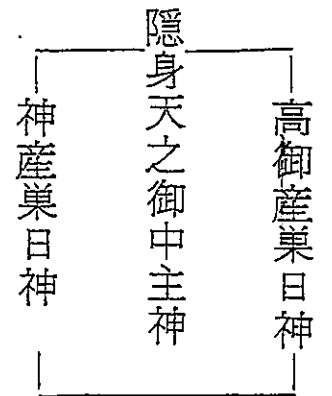
イハサカ
『磐境としての高天原』
アマテラススメオホミカミ
天照皇大御神 (天御中主大御神) → ○神

「極大極小のヒ」

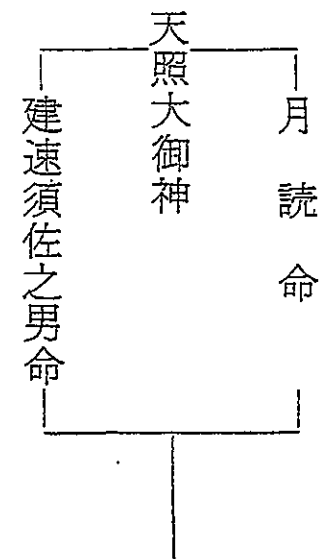


神 名	内 容	別 名
アマテラススメオホミカミ 天照皇大御神 (境 地 ○ ヒ)	イハサカ 磐境としての高天原 母胎	アマノミナカヌシノオホミカミ オオヒシルメムチノミコト
アマテラスオホミカミ 天照大御神 (実体 ⊙ ヒカリ)	(大宇宙としての) タカマノハラ 高天原の主神	カクリミ コトアマツカミ アメノミオヤ 隠身、別天神、天 祖 アメノミナカヌシノカミ 造化三神、二柱御祖神 三貴子 他多数
ツキヨミノミコト 月 読 命 (活用 ㊦ ヒトツ)	その母胎における資料 およびその活用	アマテラシマシマススメオホミカミ 天照坐皇大御神
スサノヲノミコト 素戔ミコト男尊 (再び実体 ⊙)	(小宇宙としての) 箇体としての高天原	アメノウズメノミコト (天 鈿 女 尊としての) 天照大御神

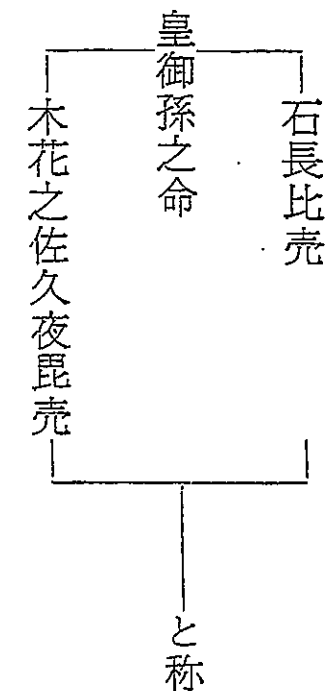
はてしと神の零ヒ



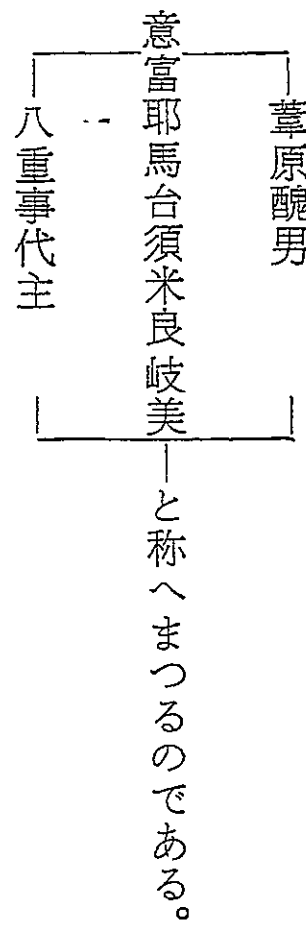
はてしと神の魂タマ



はてしと神の身ミ



へまつるが如く経に次序を逐ふて其の御名を異にされるが与に一貫したる「カミ」にてまします。更に人類世界の神としては



右側の三神はいずれも

修理すり(破壊)の作用を司る。

(左側の三神は固成の作用)

ところがその国は本来神魔包括の〇の神であるから時あつては神とも成り魔とも変るので人間の波瀾が其処に起る。皇御孫之命は天降りまして人間世界を統治統率し給ふ為に人間身として君臨せさせ給ふので人は茲に五官的に拝みまつることの出来る「神」即「中心」を仰ぎ得たのである。

阿那畏。

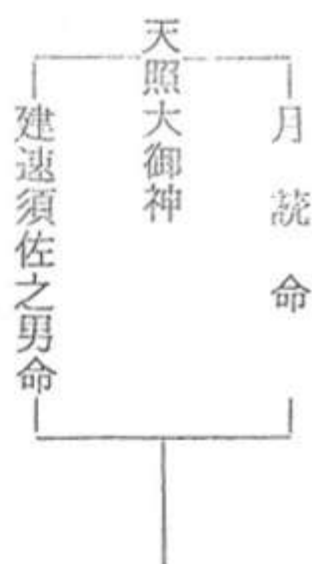
日本語にては此の「神」を「オホヤマトスメラギミ」と称へまつりて「葦原醜男」「八重事代主」の妙用を御境はしますことと拝承しまつる。

人間世界の波瀾曲折は隱身天之御中主神が神魔の軀にてまします為の活用変化なのである。之を数として見れ

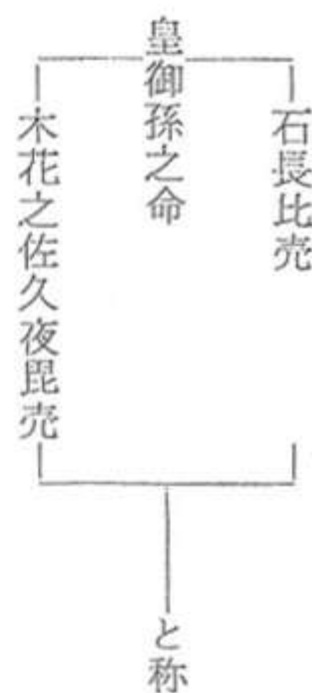
はてしと神の零



はてしと神の魂



はてしと神の身



へまつるが如く経に次序を逐ふて其の御名を異にされるが与に一貫したる「カミ」にてまします。更に人類世界の神としては

大國主の別名



大國主の息子

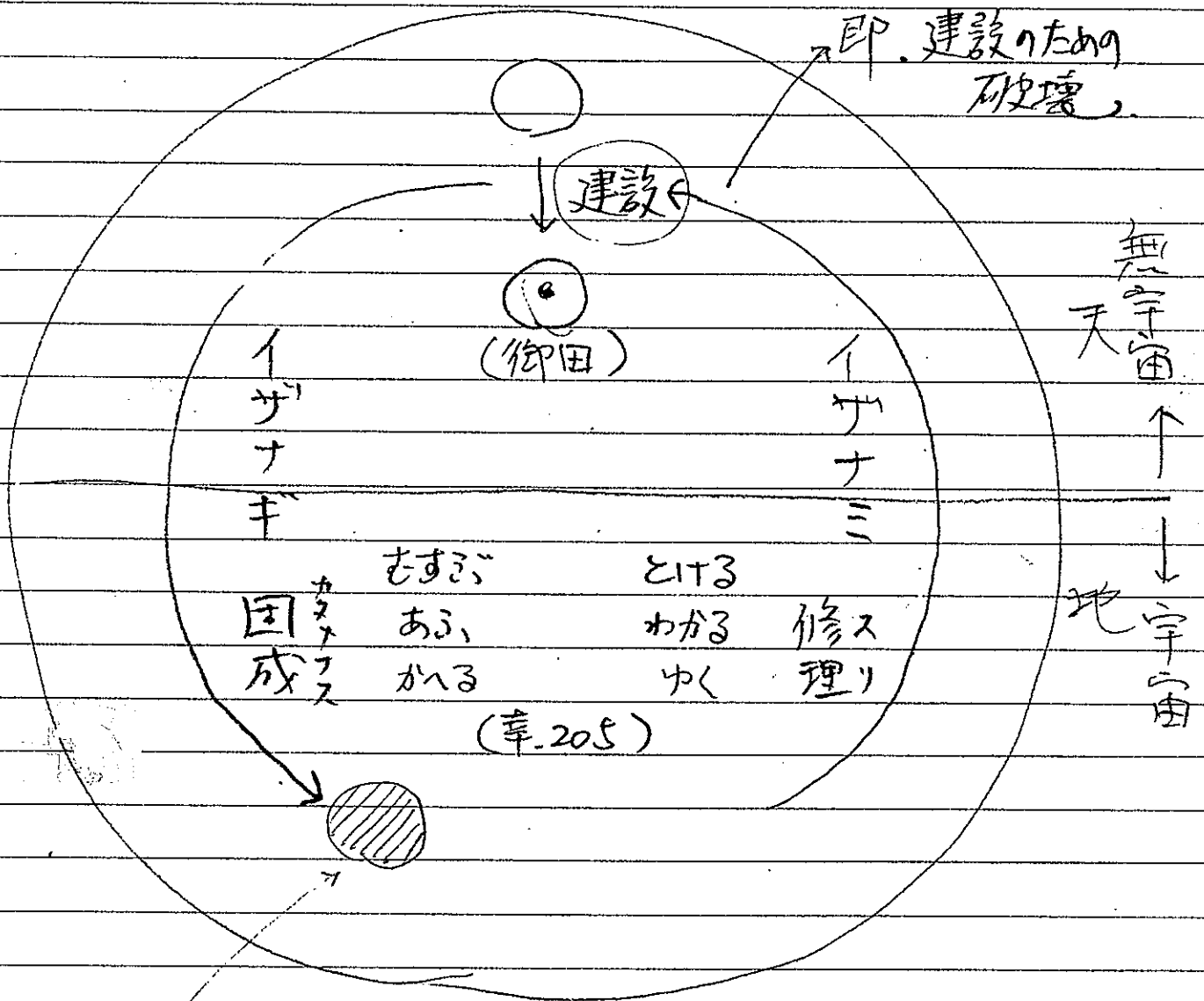
天皇自身は人間身ではあるが、皇御孫之命の諸力を正しく継承し、「人類世界の中心」として機能することに、よって、オホヤマトスメラギミと称えられるべき存在となり、アシハラシコラとヤヘコトシロヌシの諸力をも行使できるようにするのである。

ところがその国は本来神魔包括の①の神であるから時あつては神とも成り魔とも変るので人間の波瀾が其処に起る。皇御孫之命は天降りまして人間世界を統治統率し給ふ為に人間身として君臨せさせ給ふので人は茲に五官的に拝みまつることの出来る「神」即「中心」を仰ぎ得たのである。

阿那畏。ヤシハラシコラは生大刀・生弓矢で八十神を平定する修理の諸力。

日本語にては此の「神」を「オホヤマトスメラギミ」と称へまつりて「葦原醜男」「八重事代主」の妙用を御現はしますことと拝承しまつる。

人間世界の波瀾曲折は隠身天之御中主神が神魔の軀にてまします為の活用変化なのである。之を数として見れ



「イザナギノカミの神業の成り成りたる時」

「天地は存在の尽き統一りにたふ」といふ状況

アツク アリ エトゴト ミスミ

ある。

斯のやうに察て來ると、「故人を齋る」には、先決問題として、神の人と成るべきことである。と云ふと、また或は、甚難事でもあるかの如く思はれそうだが、實は誰でも、爲ようとすれば出来ることである。例へば、父母妻子の死に際會したやうな場合、人の常として極度に緊張するから、我としての直日の人と成ることが容易である。

我としての直日と云ふのは、八十萬魂がそのまま凝結して、全個體一團の火と化るので、之を、古典は、「櫛の雄柱一つ火」の祕言として傳へてある。「伊邪那美命のお崩れなされた時に、伊邪那岐命が、湯津津間櫛の男柱一つ取り闕きて、一つ火を燭して、御覽になれますと、宇土多加禮斗呂呂岐で、八雷神に成つて居られた」と記して居るが、比咩神御崩御の大事にお會ひなされても、五官的にだけでは、なほ未不徹底な爲に、神魔同凡の「一つ火」を燭して、はじめて、その實相を明らめ得たのである。人としてならば、全身心が、神の火と成つたので、本來本有の眞の相を顯し來つたので、其の原に歸つたので、或は、終に反つたとも云ふので、「鏡の船」を造り成したので、此に、「黃泉比良坂」の一線を劃して、妖魔調伏の祕儀を行じ得るに到つたのである。先にも繰返して述べたやうに、支那人の傳へた「喪」の字が、此の意味をよく教へて居る。喪とは、十口口一以の合成で、中央の一線が、顯界神域と幽界魔境とを分つもので、此の境界は、線無きの線で、「メ」と呼ぶのである。即、繼ぎ目、合せ目、變り目、別れ目、代り目、などと用ゐる目である。

此の目は、陰の「メ」であり、陽の「メ」であり、左であり、右であり、左右を合せたる目であり、母であり、子であり、母と子と、子と母とを合せたる「メ」である。母としては女で凹で、孔で穴で、左目で、「ヒダ

リ」であり、子としては芽で凸で、右目で、「ミギリ」である。

古典に、八雷神と傳へたのは、子としての「メ」で、豫母都志許賣と呼ぶ。黄泉津大神と傳へたのは、母としての「メ」で、亦等しく豫母都志許賣にてまします。別れては、母と子であるが、共に「メ」である。

此の「メ」と、彼の「メ」との偶ひては別れ、別れてはまた偶ふ。過去の過去際より、未來の未來際に彌りて、止む時無く、息む時無く、運り行くのである。

古老教へて云はく、

くすしかも、あやしきかもな。あめつちの、ありのことごと。ものみなは、ここにむすびて、そこにとけ、そこにとけては、またむすぶ。そこにわかれて、ここにあひ。ここにあひては、またわかる。わかれつ、あひつ。とけつ、むすびつ。ゆきつ、かへりつ。まがたまの、いほつみすまる。くしみたま、くすしかしこし。さきみたま、さきくまさきく。やさかにの、ふゆをこそませ。かくりよの、さちをこそませ。なきひとの、みたまみし。いまみしかみ。たまほこもちて、いまぞきませる。たましひもちて、いにますみたま。いうをえあ。

と。

その「ミタマ」は、「都夫多都御魂」であり、「阿和佐久御魂」であり、「底度久御魂」であり、猿田毘古神の御魂である。

「猿田毘古神の御魂」の神傳が存るので、私どもは、死者を齋るに、「水」を以つてすることを知り得たのである。天の「ミヅ」と地の「ミヅ」とを合せて、「麗はしき壯夫」を造り成す道を悟り得たのである。「大穴牟遲神

リ」であり、子としては芽で凸で、右目で、「ミギリ」である。

古典に、八雷神と傳へたのは、子としての「メ」で、豫母都志許賣と呼ぶ。黄泉津大神と傳へたのは、母としての「メ」で、亦等しく豫母都志許賣にいたします。別れては、母と子であるが、共に「メ」である。

此の「メ」と、彼の「メ」との偶ひでは別れ、別れてはまた偶ふ。過去の過去際より、未來の未來際に彌りて、止む時無く、息む時無く、運り行くのである。

古老教へて云はく、

くすしかも、あやしきかもな。あめつちの、ありのことごと。ものみなは、ここにむすびて、そこにとけ、そこにとけては、またむすぶ。そこにわかれて、ここにあひ。ここにあひては、またわかる。わかれつ、あひつ。とけつ、むすびつ。ゆきつ、かへりつ。まがたまの、いほつみすまる。くしみたま、くすしかしこし。さきみたま、さきくまさきく。やさかにの、ふゆをこそませ。かくりよの、さちをこそませ。

「なきひとの、みたまみし。いまみしかみ。たまほこもちて、いまぞきませる。たましひもちて、いにますみたま。いうをえあ。」

と。

その「ミタマ」は、「都夫多都御魂」であり、「阿和佐久御魂」であり、「底度久御魂」であり、猿田毘古神の御魂である。

「猿田毘古神の御魂」の神傳が存るので、私どもは、死者を齋るに、「水」を以つてすることを知り得たのである。天の「ミヅ」と地の「ミヅ」とを合せて、「麗はしき壯夫」を造り成す道を悟り得たのである。「大穴牟遲神